

# 中学生の進学希望とその規定要因における性差

## Gender Differences in Educational Aspiration —In the Case of Junior High School Students—

島 直 子

The purpose of this paper is to investigate gender differences in educational aspiration by using data of junior high school students and their parents in the metropolitan area. The results of this study indicate that (1) boys have strong aspiration for higher education because they seek education for status attainment; (2) parents' aspiration and concern about their children's future affect the aspiration of their sons and daughters; and (3) parents' attitudes toward education and gender norms significantly affect their daughters' aspiration.

### 1. 本論文の目的

本論文の目的は、中学生の進学希望とその規定要因が男女でどのように異なるかを実証的に分析し、その知見をもとに、教育における男女間格差が維持される理由について推測することである。

「教育」は個人のエンパワーメントと密接に関連しており、教育達成（＝学歴）が人々の社会経済的地位達成を強く規定することについて、多くの実証研究が積み重ねられてきた[直井・盛山編1990、原編 2000]。本論文で取り上げる子どもの進学希望（＝教育アスピレーション）は、この教育達成を将来的に決定する要素の一つに位置づけられるものである[岩永1990、中山1985]。そして教育社会学の分野では、「教育によるジェンダーの再生産メカニズム」が重要な研究テーマと位置づけられており、表向きは男女平等が進んだ戦後の教育制度の下でもなお、教育達成の性的不平等が解消されないのはなぜかが問われてきた。そしてその問題意識の発展によって、主に「女性の教育達成を阻む学校内の社会化・選抜過程」の解明を試みる研究が展開されてきた。学校の内部過程に焦点をあてたこれらの研究によって、他の社会機関に比べて平等幻想の強い学校内部に、カリキュラムの明示的な性別分化のみならず、「知識」そのものの中にある性的偏見や生徒同士の相互作用から生じる生徒文化など、女子を特定の進路へと水路づける「かくれたカリキュラム」が埋め込まれていることが明らかにされたのである[森1992、中西・堀1997]。しかし管見する限り、子どもの進学希望を規定する要因の男女差については、十分な研究がなされていないように思われる。子どもの進学希望とその規定要因にあらわれる性差にも関心が向けられるならば、従来の「学

校内の社会化・選抜過程」研究とは異なる観点から、教育達成の性的不平等が解消されない理由について考察することが可能になるだろう。

分析対象は、性役割規範を明確に自覚し、選択し始める時期とされる中学生とする。発達心理学研究によると、性役割の社会化は誕生の瞬間から始まると言えるものの、児童期までは男女の行動は非常に類似しているという。しかし思春期に入ると、異性関係の重視や独立したアイデンティティの要求などに呼応して、性役割規範がより明確に自覚され、意識的に選択されるようになるのである [賀谷1981]。

## 2. 子どもの進学希望を規定する要因—先行研究の知見—

先行研究の知見をもとに、子どもの進学希望に影響を及ぼすと考えられる要因について整理する。

第一に、親の進学期待が高い子どもほど、より高い教育達成を希望することが実証されている。濱嶋は第3回(1983年)、第5回(1989年)、第8回(1998年)「東京都子ども基本調査」における中学2年生とその母親のデータを用いて、子どもの進学希望を最も強く規定する要因は、母親の子どもへの進学期待であることを見出した [濱嶋2004]。また卯月も、小学5・6年生と中学2・3年生の親子を対象とする調査データを用いて、子どもの大学進学希望の有無に対して、母親の子どもに対する大学進学希望の有無が最も強い効果をもつことを確認している [卯月2004]。

第二に、親が子どもの将来に関心をもち、子どもと話し合うことで、子どもの進学希望が高められることが考えられる。学校から仕事への移行の困難に直面している若者(＝無業・失業・フリーターなど)にインタビュー調査を行った宮本は、進学や就職について子どもと話しあったり助言したりすることがないという親の無関心・放任が、子どもの学業達成意欲を低下させる事例について報告している。そして親から何かを期待されたという経験がない子どもは、学業に対する興味や動機づけが形成され難いのではないかと指摘した [宮本2005]。

第三に、子ども本人が学歴は重要であると考えていることが、高い教育達成を希望する重要な動機づけとなることが考えられる。日本は1950-70年代を通じて、学校で努力して成果をあげれば将来の成功につながるという信念が広くいきわたった、大衆教育社会をつくりあげてきたとされる [荻谷1995]。しかし近年、「過度な受験競争」が教育をゆがめているとの認識に導かれて、学業成績を基準とした競争圧力を除去する教育改革や入試制度が導入されるなど、学習や教育達成のメリットが見えにくい社会へと変化していることが指摘されている。そしてその結果、それでも尚、教育達成のメリットを見抜いている上位階層の子どもと、それ以外の子どもの中で、学習意欲に格差が生じている可能性が示されている。「あくせく勉強してよい学校や会社に入っても、将来の生活に大した変わりはない」と感じる子

どもたちは、むしろ「学校を通じた成功物語」から降り、現在の生活を楽しまうと意識転換をはかることによって、自己の有能感が形作られるという〔荻谷2001〕。

第四に、前述の濱嶋と卯月によって、学業成績が高い子どもほど進学希望が高いことが実証されている〔濱嶋2004、卯月2004〕。

### 3. 分析方法

#### (1) 分析手法とデータ

分析モデルは、以下のように設定する。

はじめに、2. で整理した「子どもの進学希望を規定する要因（子どもに対する親の進学期待、子どもの将来に対する親の関心、子どもの学歴重視度、子どもの学業成績）」とコントロール変数（母親の学歴、子どもの性別、大卒資格が有効な職業の希望）を独立変数、「子どもの進学希望」を従属変数とする重回帰分析を行う（モデル1）。これによって、「子どもの性別」をコントロールした上で、「子どもの進学希望を規定する要因」のそれぞれが「子どもの進学希望」に及ぼす効果が明らかにされる。

次に、「子どもの性別」と「子どもの進学希望を規定する要因」それぞれとの交互作用項を投入する（モデル2ーモデル4）。これによって、モデル1で検証された「子どもの進学希望を規定する要因」の効果が、「子どもの性別」によって異なるものであるかが明らかにされる。

データは、2005年9月ー10月に実施された「現代親子の意識と実態：首都圏中学1年生調査」<sup>1</sup>を用いる。母集団は首都圏（一都三県）の中学1年生親子である。学校を配布先とする集合調査なので、サンプリングは厳密には無作為といえない。しかし対象校の選定過程では、13歳人口を基準に都県で層化し、公立私立中学校在籍割合も考慮して地域をランダムに選ぶといった、母集団からの無作為抽出に近づけるための配慮がなされた。対象校は埼玉1校、千葉1校、神奈川3校（うち私立1校）、東京5校の合計10校、配布数は1363である。調査票は保護者用と子ども用がそれぞれ別に作成され、ペアで回収された。有効回収票は615（回収率 45.1%）であった。

#### (2) 変数の操作化

「母親の学歴」は、親の回答を教育年数に変換した。「子どもの性別」は、子の回答を男子=1、女子=0とする男子ダミーに変換した。「大卒資格が有効な職業の希望」は、次のように操作化した。今回の調査では子どもに対して、「あなたは将来どのような職業につきたいですか。

---

1. 本調査は、明治学院大学社会学部社会学科の社会調査実習の一環として行われたもので、筆者は調査アシスタントとして参加した。データの使用を快諾してくださった実習担当教員品田知美さんに感謝申し上げる。

ご自由にお書き下さい」とたずねられている。その回答を、「四年制大学を卒業することが不可欠な職業（医師、教師など）や、不可欠ではないが就職・昇進・待遇などにおいて有利に働く職業（公務員など）」と、「それ以外の職業（美容師、プロスポーツ選手、芸能人など）や、希望する職業がない（＝わからない、まだ決めていない、無回答など）」に二分した。そして前者を1、後者を0とするダミー変数に変換した。

「子どもに対する親の進学期待」は、「お子さんの進学はどこまで心づもりしていますか」と親にたずねた回答を、教育年数に変換した。「子どもの将来に対する親の関心」は、子どもとよく話す話題として「将来のこと」を選択した親を1、選択しなかった親を0とするダミー変数とした。「子どもの学歴重視度」については、「学歴は大事だと思いますか」と子ども本人にたずねた。選択肢は「とても思う」から「思わない」までの4件法とし、数値を反転して4－1点を与えた。「子どもの学業成績」は、子ども本人に「上の方」「真ん中より上」「真ん中くらい」「真ん中より下」「下の方」のいずれと思うか自己評価してもらい、数値を反転して5－1点を与えた。

従属変数の「子どもの進学希望」は、子ども本人に「進学はどこまで希望していますか」とたずね、回答を教育年数に変換した。

#### 4. 分析

##### (1) 子どもの性別にみた分析対象者の特徴

分析モデルの検証に先立ち、各項目への回答が子どもの性別によってどのように異なるか確認したい。

従属変数である「子どもの進学希望」には、有意な男女差がみられる。男子の6割弱が「大学以上」への進学を希望しているのに対し、女子のそれは4割にとどまるのである。そして女子の3割が「専門学校・各種学校・短期大学」を希望している（表1）。尚、この分布は、「第8回 東京都子ども基本調査（1998年）」における中学2年生男女の進学希望とほぼ同様である〔東京都生活文化局編1999〕。

次に独立変数についてであるが、子どもの性別によって「母親の学歴」に有意な差はみられなかった。尚、父親の社会経済的地位に関する要因（父親の学歴、年収、職種）についても確認してみたが、やはり男子の父親と女子の父親の間で有意差はなかった。そして「子どもの学歴重視度」「子どもの学業成績」「子どもの将来に対する親の関心」も、子どもの性別によって有意な差はなかった。また保護者票を回答した親の性別（＝父母どちらが回答したか）についても、子どもの性別によって有意差はなかった。

しかし「大卒資格が有効な職業の希望」の有無には、子どもの性別によって有意な差がみられる。将来つきたい職業が、四年制大学を卒業することが有利に働く職種である割合は男子が2割強、女子が4割であり、女子の方が高い（表1）。「子どもに対する親の進学期待」

表-1 子どもの性別にみた分析対象者の特徴

子どもの進学希望		
	男子 (n=287)	女子 (n=296)
中学校	1.4%	0.7%
高等学校	32.8%	29.4%
専門・各種・短大	9.8%	29.4%
大学	53.7%	38.9%
大学院	2.4%	1.7%
(カイ 2乗値=37.064、自由度=4、P<.001)		
大卒資格が有効な職業の希望		
	男子 (n=297)	女子 (n=309)
希望あり	24.6%	40.5%
希望なし	75.4%	59.5%
(カイ 2乗値=17.347、自由度=1、P<.001)		
子どもに対する親の進学期待		
	男子の親 (n=195)	女子の親(n=233)
中学校	0.5%	0.0%
高等学校	8.2%	10.7%
専門・各種・短大	6.2%	29.6%
大学	82.6%	56.7%
大学院	2.6%	3.0%
(カイ 2乗値=43.258、自由度=4、P<.001)		

1) 子どもの性別により、有意差がみられる項目のみ表記

も子どもの性別によって大きく異なり、男子の親の方が、より高い教育達成を子どもに期待している。男子の親の場合、「大学以上」を期待する人が8割強にのぼるのである(表1)。

以上のような結果から、第一に、「母親の学歴」をはじめとする親の社会経済的地位、子ども本人の「学歴重視度」と「学業成績」、「子どもの将来に対する親の関心」については、子どもの性別によって有意な差はみられない。第二に、女子よりも男子、また女子の親より男子の親の方が、より高い教育達成を希望もしくは期待している。しかし「四年制大学卒が不可欠、もしくは有利となる職業」につくことを希望する人の割合は、むしろ女子の方が多い。

## (2) 子どもに対する親の意識態度 – 「進学期待」と「将来に対する関心」の違い –

独立変数である「子どもに対する親の進学期待」と「子どもの将来に対する親の関心」という親の意識態度は、異なる性質をもつものであろうか。この点について確認するべく、第一に、サンプルを子どもの性によって分けた上で、両項目の関連についてクロス分析を用いて検証してみた。その結果、「子どもに対する親の進学期待」と「子どもの将来に対する親

の関心」は、男子の親、女子の親いずれにおいても、有意な関連をもたないことが示された（表は略）。つまり子どもにより高い教育達成を望む親が、「将来のこと」について必ずしも子どもとよく話しているわけではない。

第二に、「子どもに対する親の進学期待」と「子どもの将来に対する親の関心」それぞれについて、「親の社会経済的地位（＝父親の学歴、母親の学歴、父親の職種）」、「親子それぞれの学歴重視度」、「子どもの学業成績」との関連を分散分析で検証してみた。尚、「母親・父親の学歴」は教育年数、「父親の職種」は専門・技術・管理職を1とするダミー変数に変換した。また「親の学歴重視度」は、「子どもの学歴重視度」と同一の質問文と選択肢によってたずねられている。分散分析の結果は、表2のとおりである。まず「子どもに対する親の進学期待」は、男子サンプルでの「子どもの学歴重視度」を除くすべての項目と有意な関連をもつ。つまり、「子どもに対する進学期待」は社会経済的地位が高い親ほど高い。また親自身の「学歴重視度」を反映した意識態度と考えられる。そして「子どもの学業成績」を高める、もしくは「子どもの学業成績」が高いときに高められるといえる（ただし男子における「父親の学歴」「母親の学歴」「親の学歴重視度」「子どもの学歴重視度」については、「親の進学期待」が「大学以上」グループの値が最も高いものの、「高校以下」グループと「専門・各種・短大」グループでは値が逆転している）。一方「子どもの将来に対する親の関心」は、男子サンプルでの「母親の学歴」を除き、すべての項目と関連をもたない。これらの結果が

表-2 子どもの性別にみた「子どもに対する親の進学期待」「子どもの将来に対する親の関心」と親の社会経済的地位、親子の学歴重視度、子どもの学業成績との関連

	父の学歴	母の学歴	父の職種	親の学歴重視度	子の学歴重視度	子の成績
子どもに対する親の進学期待						
[子の性：男] 高校以下	13.54 (13)	13.00 (16)	.12 (17)	2.59 (17)	3.00 (17)	2.06 (17)
専門・各種・短大	13.00 (6)	12.91 (11)	.17 (12)	2.58 (12)	2.73 (11)	2.42 (12)
大学以上	14.57 (137)	13.68 (148)	.40 (166)	2.92 (165)	3.11 (165)	3.51 (164)
F 値	3.969*	2.953 +	3.893*	3.361*	1.563	17.499***
[子の性：女] 高校以下	12.50 (16)	12.43 (23)	.16 (25)	2.36 (25)	2.80 (25)	2.72 (25)
専門・各種・短大	13.73 (51)	13.08 (63)	.42 (69)	2.59 (69)	2.81 (68)	2.97 (69)
大学以上	15.08 (126)	14.21 (135)	.50 (139)	2.83 (138)	3.09 (138)	3.59 (135)
F 値	27.439***	24.157***	5.084**	7.959***	4.317*	11.771***
子どもの将来に対する親の関心						
[子の性：男] 話をしない	14.28 (180)	13.38 (210)	.33 (245)	2.89 (157)	3.05 (243)	3.07 (242)
話をする	14.44 (45)	14.00 (47)	.37 (52)	2.75 (40)	2.98 (51)	3.33 (52)
F 値	.298	7.395**	.231	1.587	.435	2.072
[子の性：女] 話をしない	14.34 (194)	13.59 (223)	.42 (237)	2.73 (176)	2.92 (236)	3.15 (232)
話をする	14.78 (54)	13.85 (67)	.35 (72)	2.64 (58)	3.01 (71)	3.44 (70)
F 値	2.509	1.520	1.277	.839	1.008	3.769

- 1) 分散分析の平均値
- 2) 「子どもに対する親の進学期待」は、「中学校」が1人、「大学院」が12人と少ないため、「高校以下」「専門学校・各種学校・短期大学」「大学以上」に分類した。
- 3) 「父親/母親の学歴」は教育年数、「父親の職種」は専門・技術・管理職ダミー。
- 4) 値は平均値。( ) はケース数。
- 5) + p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001



ら、独立した意識態度である「子どもに対する親の進学期待」と「子どもの将来に対する親の関心」の違いとして、次の点が浮かび上がる。「親の進学期待」が階層要因や親の学歴観、子どもの学業成績と密接に関連するのに対し、「子どもの将来に対する親の関心」はこれらとほぼ関連をもたない。つまり「子どもの将来に対する親の関心」は、階層要因や親子双方の学歴観、子どもの学業成績とは独立した意識態度であると考えられる。

### (3) 「子どもの進学希望の規定要因」における性差

次に重回帰分析を使用して「モデル1-4」を検証したところ、表3のような結果が得られた。

表-3 子どもの進学希望を規定する要因 (標準化係数)

	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4
母親の学歴 (教育年数)	.029	.026	.024	.026
男子ダミー	.039	.189	.472	.352
大卒資格が有効な職業の希望	.120*	.119**	.127**	.134**
子どもに対する親の進学期待 (教育年数)	.317***	.299***	.318***	.347***
子どもの将来に対する親の関心	.134**	.134**	.140**	.140**
子どもの学歴重視度	.144**	.145**	.049	.036
子どもの学業成績	.148**	.146**	.137**	.050
男子ダミー×子どもに対する親の進学期待		.233	.070	-.354
男子ダミー×子どもの学歴重視度			.473*	.502*
男子ダミー×子どもの学業成績				.302+
R <sup>2</sup>	.247	.247	.258	.265
調整済みR <sup>2</sup>	.232	.231	.240	.245
n	380	380	380	380
F検定	p<.001	p<.001	p<.001	p<.001

(+p<.10 \*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001)

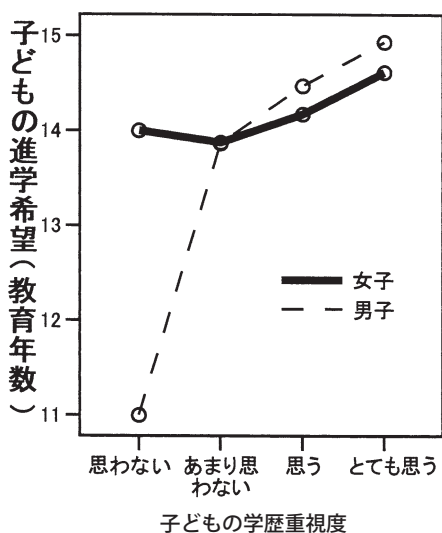


図-1 進学希望に対する性別と学歴重視度の交互作用

「モデル1」の結果から、「子どもの進学希望」に対して有意な効果をもつ要因は「大卒資格が有効な職業の希望」「子どもに対する親の進学期待」「子どもの将来に対する親の関心」「子どもの学歴重視度」「子どもの学業成績」であるといえる。つまり四年制大学を卒業することが不可欠もしくは有利な職業を希望する、親の進学期待が高い、親が子どもの将来に関心をもちそれについて話す、学歴は大事だと考えている、学業成績が高い子どもほど、より高い教育達成を希望する。一方、「母親の学歴」と「子どもの性別」は独立した効果をもたない。

次に交互作用の検証にうつる。

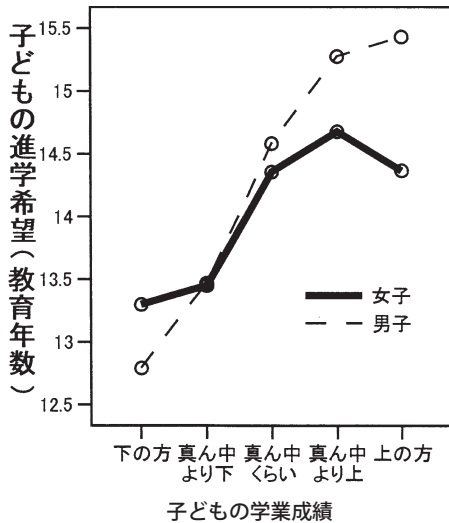


図-2 進学希望に対する性別と学業成績の交互作用

「モデル2」の結果をみると、「子どもの性別」と「子どもに対する親の進学期待」の交互作用項は有意ではない。これは、子どもの性別によって「親の進学期待」の効果は異ならないことを意味する。つまり性別にかかわらず、「親の進学期待」が高い子どもほど「進学希望」が高い。

「モデル3」では、「子どもの性別」と「子どもの学歴重視度」の交互作用が検証されている。交互作用項を加えると「子どもの学歴重視度」の主効果が消え、交互作用項が有意な効果をもつことが明らかになった。これはつまり、子どもの性別によって「学歴重視度」の効果が異なることを意味する。この交互作用

の方向をみるため、「子どもの性別」と「子どもの学歴重視度」の2元配置分散分析を行ったところ、有意性は低い統計的有意が確認された ( $F=2.527, df=3, p<.10$ )。分散分析による平均値を図示したのが図1である。図1をみると、「子どもの学歴重視度」と「子どもの進学希望」との正の相関は、男子においてより大きい。女子の場合、「学歴重視度」の高さは「進学希望」をさほど高めないのである。しかし男子においても、学歴は大事だと「あまり思わない」から「思う」、「とても思う」と回答したグループにかけては、「進学希望」はわずかに高まる程度である。学歴は大事だと「思わない」として、学歴の重要性を明確に否定するグループにおいて「進学希望」が著しく低いといえる。

「モデル4」では、「子どもの性別」と「子どもの学業成績」の交互作用が検証されている。交互作用項を加えると「子どもの学業成績」の主効果が消え、有意性は低い交互作用項が効果をもつことが明らかになった ( $p<.10$ )。これはつまり、子どもの性別によって「学業成績」の効果が異なる傾向にあることを意味する。そこで「子どもの性別」と「子どもの学業成績」の2元配置分散分析を行ったところ、有意性は低い統計的有意が確認された ( $F=2.080, df=4, p<.10$ )。分散分析による平均値を図示したのが図2である。男女とも「学業成績」が高いほど「進学希望」が高い傾向にあるが、その相関は男子においてより大きいことが読み取れる。

ところで「子どもの性別」と「子どもの将来に対する親の関心」の交互作用についてであるが、両項目ともダミー変数であるため、交互作用項を作成することが不可能である。しかし両項目の2元配置分散分析を行ってみたところ、両者の関連は子どもの性別によって異なるものではないことが確認された ( $F=.002, df=1, ns$ )。こうした結果から、「子どもの将来に対する親の関心」が「子どもの進学希望」に及ぼす効果は、「子どもの性別」によって異ならないと推測される。



## 5. 考察と今後の課題

これまでの分析結果をもとに「中学生の進学希望とその規定要因における性差」に関する知見を整理し、教育における男女間格差が維持される理由について推測したい。

第一に今回のデータでは、学業成績が高い女子や、学歴は重要であると考えた女子が、必ずしもより高い教育達成を希望するわけではないという結果が得られた。これは、女子の間では「高い学歴を獲得すること」が共通目標として目指されていないことを示唆する。そしてこのような傾向については、多くの先行研究でも論じられてきた。たとえば女子にのみ課される家庭役割期待は、学校がフォーマルに語る教育上・職業上の達成期待と矛盾するものである。そしてその結果もたらされる役割葛藤が、教育達成における女子の意欲を低下させるメカニズムが注目されてきたのである [天野1988]。

第二に男子の場合は女子と異なり、「学業成績」の高さが「進学希望」を有意に高める。また「学歴重視度」が効果をもち、学歴は大事だと「思わない」男子の「進学希望」が著しく低い。加えて「大卒資格が有効な職業」を希望する者は2割強にすぎないのだが、5割強が「大学以上」への進学を希望している。これらの知見から、男子においては「高い教育達成」を良しとする価値観が広く浸透していることが推測される。つまり男子は「希望する職業につくため」という明確な目的がなくとも、いわば自明の理として大学進学を目指すのであろう。そして高い教育達成を目指さない男子は、「学歴の重要性」を明確に否定する意識態度が必要とされるのではないだろうか。つまり子どもの進学希望に男女間格差がみられる一因として、「高い教育達成」に対する価値付与が男女で異なることが考えられる。

第三に、「子どもに対する親の進学期待」「子どもの将来に対する親の関心」といった親の意識態度は、子どもの性別にかかわらず「子どもの進学希望」に効果を及ぼす。ただし「子どもに対する親の進学期待」と「子どもの将来に対する親の関心」は独立した意識態度であり、特性も異なることが示された。前者の「進学期待」は、社会経済的地位や子どもの学業成績が高い親ほど、また男子の親の方が高い。一方、後者の「子どもの将来に対する親の関心」は、親の社会経済的地位や子どもの学業成績、子どもの性別とも関連をもたない。つまり社会経済的地位や子どもの学業成績が高い親、男子の親が、「子どもの将来に関心をもち、子どもと話しあうこと」をより頻繁に行っているわけではないといえる。

「子どもに対する親の進学期待」と「子どもの将来に対する親の関心」は、男女いずれの「進学希望」にも効果を及ぼすことから、これら親の意識態度は、「子どもの進学希望」に対してより普遍的な影響力をもつと考えられるだろう。親が直接に育児・教育に携わる「教育する家族」の大衆化が指摘される [神原2001] が、「親が子どもに対して高い進学期待をもつこと」「親が子どもの将来に関心をもち、それについて子どもと話しあうこと」の重要性があらためて実証されたともいえる。しかし両者は、独立した意識態度である。後者の「子どもの将来に対する関心」は、親の社会経済的地位や子どもの学業成績、子どもの性別と関

連をもたない。<sup>2</sup> ゆえに教育による階層／ジェンダー再生産に寄与することなく、子どもの教育達成を高め得る要因として注目することができるだろう。一方、前者の「進学期待」は、親の社会経済的地位やそれとの関連が指摘されてきた子どもの学業成績、子どもの性別と密接に関連することから、教育による階層／ジェンダー再生産を促す一因であると考えられる。なかでも男女間格差を強く規定しているであろうことは、次のような結果からも推測される。今回のデータによると、「子どもの進学希望」には有意な男女差がみられる。しかし重回帰分析を行ったところ、「子どもの性別」は「子どもの進学希望」に対して独立した効果をもたないことが明らかになった。じつは先行研究においても、今回と同様、性別は独立した効果をもたないという結果が得られている [濱嶋2004]。これらの知見は、子どもの進学希望にあらわれる男女差が「男であること」「女であること」そのもの(=「子どもの性別」)に規定されるものではないことを意味する。おそらく、「子どもの進学希望」に対して比較的大きな効果をもつ「親の進学期待」が子どもの性別によって大きく異なるために、その格差が男女の進学希望の格差に反映されているのであろう。

第四に、すでに論じたように「子どもに対する進学期待」「子どもの将来に対する関心」といった親の意識態度は、性別にかかわらず「子どもの進学希望」に効果を及ぼす。しかし男子の場合、本人の「学業成績」が「進学希望」に対して独立した効果をもつ。ゆえにかりに「親の進学期待」や「関心」が低くとも、本人が高い「学業成績」を収めているならば高い教育達成が希望され得る。一方、女子の「進学希望」に対して効果をもつのは、「子どもに対する進学期待」「子どもの将来に対する関心」といった親の意識態度のみである。つまり女子にとっては、日々接する親から高い教育達成を期待されるか否か、自身の将来に関心をもたれ、家庭生活のなかでそれが話題として取り上げられるか否かが、より重要であると考えられる。そして女子(娘)に対する親の進学期待は、「大学以上」が6割、「専門・各種・短大」が3割であり、男子(息子)に対するそれと比較して分散している。これらの結果から、親世代のジェンダー意識が、女子にとっても地位達成は重要であるとして、「高い教育達成」を期待するものへと収斂されていくか否かが、教育における男女間格差の今後を強く規定すると考えられる。

では最後に、本論文の限界について論じる。

「子どもの将来に対する親の関心」が「子どもの進学希望」に及ぼす効果については、さらなる検証が不可欠である。なぜなら「子どもの将来に対する親の関心」については、子ど

---

2. 今回の結果から、「子どもの将来に対する親の関心」は「子どもの学業成績」に影響を及ぼすことなく、直接的に「子どもの進学希望」に働きかける要因である可能性が考えられる。近年、18歳人口の減少などにより、大学全入時代の到来が指摘される。つまり「高い教育達成」を果たすために、「高い学業成績」を収めることが必ずしも不可欠とはされない状況が生じつつあるといえるだろう。こうした社会状況のなかで「子どもの将来に対する親の関心」は、「子どもの学業成績」と密接に関連する「親の進学期待」とは異なるルートを通じて、子どもの教育達成を高め得る要因としても注目されるだろう。

もとよく話す話題として「将来のこと」を選択した親を1、選択しなかった親を0とするダミー変数によってとらえられたにすぎない。ゆえにあくまで親の認識であり、子どもも「将来のことをよく親と話す」と認識しているとは限らない。また「将来のこと」には進学、就職、結婚など様々な話題が考えられる。つまり本論文では単純なダミー変数を用いて、『親が子どもと「将来のこと」をよく話す」と認識する状況にあること』が男女いずれの進学希望に対しても正の効果をもつ、という傾向性が見出されたにすぎない。

#### 引用文献

- 天野正子 1988 「〈性と教育〉研究の現代的課題:かくされた〈領域〉の持続」『社会学評論』155: 266-283.
- 濱嶋幸司 2004 「都市中学生の進学アスピレーションに関する計量分析:調査データの3時点(1983年・1989年・1998年)比較から」『上智大学社会学論集』28: 69-86.
- 原純輔編 2000 『日本の階層システム1 近代化と社会階層』東京大学出版会.
- 岩永雅也 1990 「アスピレーションとその実現:母が娘に伝えるもの」岡本英雄・直井道子編『現代日本の階層構造4 女性の社会階層』東京大学出版会 pp.91-118.
- 賀谷恵美子 1981 「性役割の社会化」女性社会学研究会(編)『女性社会学をめざして』垣内出版 pp.113-154.
- 神原文子 2001 「〈教育する家族〉の家族問題」『家族社会学研究』12(2): 197-207.
- 荻谷剛彦 1995 『大衆教育社会のゆくえ:学歴主義と平等神話の戦後史』中公新書.
- 荻谷剛彦 2001 『階層化日本と教育危機:不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂.
- 宮本みち子 2005 「家庭環境から見る」小杉礼子(編)『フリーターとニート』勁草書房 pp.145-197.
- 森 繁男 1992 「〈ジェンダーと教育〉研究の推移と現況:〈女性〉から〈ジェンダー〉へ」『教育社会学研究』50: 164-183.
- 中西祐子・堀健志 1997 「〈ジェンダーと教育〉研究の動向と課題:教育社会学・ジェンダー・フェミニズム」『教育社会学研究』61: 77-99.
- 中山慶子 1985 「女性の職業アスピレーション:その背景、構成要素、ライフコースとの関連」『教育社会学研究』40: 65-86.
- 直井 優・盛山和夫編 1990 『現代日本の階層構造1 社会階層の構造と過程』東京大学出版会.
- 東京都生活文化局編 1999 『第8回 東京都子ども基本調査報告書 大都市における児童・生徒の生活・価値観に関する調査』.
- 卯月由佳 2004 「小中学生の努力と目標:社会的選抜以前の親の影響力」本田由紀(編)『女性の就業と親子関係:母親たちの階層戦略』勁草書房 pp.114-132.